アグリコル・ペルディギエの遍歴

天野史郎

一、旅立ち

一八六三年七月一五日、アグリコル・ペルディギエ（Agricol Perdiguier, 1805-1875）（図1）はフランス遍歴の旅にでる。既に五七歳、もはや若いとはいえぬアグリコル・ペルディギエがフランス各地を経巡るのは易しいことではない。しかし遍歴の想いはやまず、苦労を承知の旅立であった。

事の起こりはジャンセルム（Jenselme）という親方から持ちかけられた計画であった。ジャンセルムはパリに大きな家具製造のアトリエを構え、レジオン・ドヌール勲章を佩用する功成り名遂げた親方であった。彼は同じく職人階層から身を起こし、一八四八年二月革命の後には代議士にまで上り詰めた職人の英雄ペルディギエを誘って、旅に出ることを提案したのである。ともにフランス遍歴の職人から身を立てたのであれば、二人の旅はフランス遍歴の旅（Tour de France）でなければならなかった。

フランスの職人、コンパニョン（compagnon）ははるか中世の昔から、仕事を求め、腕を磨くためフランス各地を経巡るのが慣わしであった。旅こそは職人の学校であり、伝統を受け継ぐ機会とされたのであった。ジャンセルムもペルディギエも若き日に職人修行のためフランス遍歴の旅をしたのだ。職人のアイデンティティは遍歴にこそある。しかし産業革命の進行とともに手工業の職人、コンパニョンは仕事を奪われ、その伝統を育んできた組織であるコンパニョナージュ（compagnonnage）も窮地に陥っていた。その再生に生涯を捧げてきたペルディギエは、旅立ちを前に急死したジャンセルムの無念の遺志を継いでひとり計画を実行に移したので

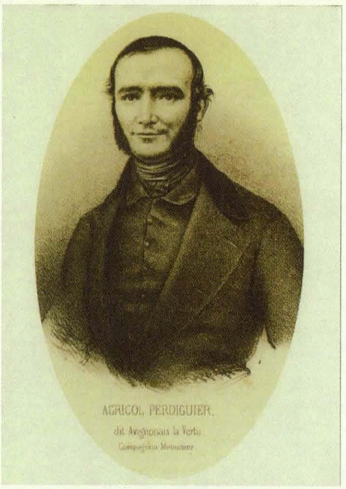

図1　アグリコル・ペルディギエ

あった。

ペルディギエ三度目の遍歴である。初めて遍歴の空の下にあった若き日の己に思わず知らず今の己を重ね合わせ、あるいは波乱に満ちた生涯を顧みて、この度の遍歴はいかばかり感慨深いものであったことか。

二、アグリコルの修行時代

アグリコルは一八〇五年一二月四日に南仏アヴィニョン近郊の村モリエール（Morières）に生を享けた。父はナポレオンのイタリア遠征に従軍したこともある共和主義的な思想の持ち主であった。アグリコルは王党派から嫌がらせを受ける父を見て育った。兄二人が母親の田畑を受け継ぎ農民となったため、アグリコルが父の仕事、指物大工を目指すことになる。

アグリコルは数あるコンパニョナージュのうち、指物大工の多くが加入する「自由の掟のコンパニョン」（Compagnons du Devoir de Liberté）の徒弟となる。「自由の掟」派のコンパニョナージュはソロモン王を始祖と仰ぐ流派であり、そのうち指物大工はガヴォ（Gavot）と呼ばれる。

徒弟となってすぐフランス遍歴の旅に出た。一八二四年四月二〇日のこと、一八歳の春に独り立ちの旅である。その開放感はいかばかりであったか。しかも遍歴の旅の空にはいずれも若い盛りの青年が数多くいた。相棒には事欠かない。

一八二四年一一月一日の万聖節、モンプリエで晴れてコンパニョンに昇進した。徒弟となってからわずか半年、コンパニョンの杖、青と白のクルール（襷）（図2）、そして通り名が与えられた。Avignonnais-la-vertu「有徳のアヴィニョン人」の誕生である。

ヨーロッパでは中世の昔から街道を行き交う多くの遍歴職人が見受けられた。その職人組織の始まりは歴史の闇に隠れ杳としてわからぬが、フランスのコンパニョナージュは独自の歴史、伝説を作り上げた。彼らが始祖として仰ぐのは三人。ソロモン王、親方ジャック、そしてスビーズ神父である（図3）。コンパニョナージュの神話は組織の起源を旧約聖書のソロモン王にまで遡らせる。ユダヤ＝キリスト教的伝統のもとソロモン王による神殿建設は旧

約聖書のなかで特筆される記念碑的な建築事業であり、その建築に携わったとされる親方ジャック、スビーズ神父が直接の始祖となる。その二人はしかしイェルサレムからの帰途、仲違いをし、スビーズの配下が親方ジャックの命を狙い、親方ジャックはかろうじてその魔手を逃れたとされる。このため親方ジャックを奉ずるコンパニョン、スビーズ神父を奉ずるコンパニョン、いずれも「掟」派（掟のコンパニョン Compagnons de devoir）を構成する二大流派であるが、ことあるごとに他方の非をあげつらい、争うこととなる。コンパニョナージュはその発端から分裂の、抗争の歴史であったのだ。

図2　杖とクルール（©KUMASEGAWA）

図3　三人の始祖、親方ジャック、ソロモン王、スビーズ神父、縄職人の作品（©KUMASEGAWA）

しかし抗争についての歴史家の解釈はコンパニョンの神話とは異なる。需要の、仕事の少ない中世社会であれば、職人たちは仕事を得るため心ならずも相争わざるを得なかった。遍歴という制度も同様の理由からうまれたのだ。さらにドイツにおいては遍歴強制といわれる制度まであった。町に定住しギルドを構成する親方が、自分の仕事を奪われぬよう余計な職人を町から追い出すように編み出した制度である。

こうしてギルド、フランス語でコルポラシオンと呼ばれる同業組合に依る親方と対立するに至った職人は職人のみの同職組合であるコンパニョナージュをつくったのだ。コルポラシオンに加盟していなければ親方は職業（メチエ）を営むことは許されない。そしてコンパニョナージュに加入していなければ職人として働くことも許されないことになる。コンパニョナージュに非加入の職人を雇うのはもってのほか、手間賃、食事、酒代の多寡など待遇をめぐって激しく親方とやりあった。これがストライキの起源である。ストライキは近代労働運動の発明であるかのようだが、実際は古く中世にルーツをもつ。オランダの職人は「トリック」という言葉を合図に一斉罷業に入った。ストライキはこの「トリック」に語源を発する。ヨー

ロッパでは中世の昔から職人は業種別に組織され、業種ごとにストライキをした。パン屋の職人がストライキに入ればパンの供給がストップするのである。

そして親方衆との対立のみならず、同じ職人組織とはいえ流派が異なればこれまた職人同士で利害が対立する。ある町の仕事をいずれの流派が独占するか、組織の存亡を懸けた血腥い抗争が引き起こされる。遍歴と抗争、これがコンパニョナージュの習いであった。職人組織はその暴力沙汰の故に、そして同盟罷業の故に中世の昔から非合法とされてきたのだ。

しかしコンパニョナージュは、親方の都合から制度化されたこの遍歴をみずからの修行の場へと、また伝統継承の仕組みへと変えていった。ソロモン神殿建立から戻る親方ジャック、スビーズ神父の旅になぞらえて遍歴を修行の場に構築していったのだ。

フランスのキリスト教化の伝説もイェルサレムから流れ着いたマグダラのマリアに遡る。親方ジャック、スビーズ神父の伝説とともに、あるいはまた遠く十字軍の記憶とともに、イェルサレムとフランスの往還は文化伝来の雛形としてコンパニョナージュの遍歴の旅に記憶されている。マグダラのマリアが庵を結んだサント・ボームはコンパニョナージュの聖地として今日なお多くのコンパニョンが巡礼に訪れる。

遍歴の旅はどこから始めてもよい。通例自らの出身地に近い町を出発点とし、その町でまず徒弟としてのイニシエーションを受ける。コンパニョナージュの歴史、コンパニョンとしての作法、仁義の切り方、秘密、義務を一通り叩き込まれる。時にいじめに近い通過儀礼を課し忠誠を誓わせるのであった。

そして遍歴修行にでる。時計回りにフランス各地を巡る。もちろん徒歩の旅である。そのため杖が、時に喧嘩の立ち回りの武器としても使われたにせよ、コンパニョンにとって欠かせぬシンボルとされる。

地方ごと文化の違いが大きかったこの時代にそれぞれの土地を巡り歩いていく。自然も、人も、言葉も、風習も違う。もちろん食べ物も。肌でフランスの多様性を確かめる旅でもあった。

町に辿り着いた職人はそれぞれのコンパニョナージュの管理する職人宿に草蛙を脱ぐ。宿には「おふくろ」(mère)と呼ばれる女性がおり、若い職人のそれこそ母親代わりとなり世話を焼いた。このため職人宿そのものも「おふくろ」と呼ばれた。「おふくろ」は単に宿泊の便を提供するばかりでなく、その町の世話役(rouleur)が仕事の斡旋をしてくれる。というよりその世話役だけが親方と交渉する権利をもち、世話役を通してのみ仕事に就かなければならない仕組みであった。抜け駆けを防ぐことによりコンパニョンの最低賃金を保ち、そしてコンパニョナージュの団結を保つためであった。

仕事の斡旋が不調な場合は、「おふくろ」で一定期間寝食が保証された。また仕事の最中に怪我をし、あるいは病気になったという場合には支部のメンバー全員で援助をする決まりの相互扶助システムまであった。さらに「おふくろ」では先輩のコンパニョンによる後輩の技術教育が組織的になされ、教育機関としても機能していた。このようにコンパニョナージュは単なる労働者団体ではなく、職人相互の扶助をおこなう共済組合的組織であり、遍歴を行うコンパニョンに無くてはならぬ組織であったのだ。

アグリコルもこうした「おふくろ」をたずね歩いて遍歴修行をしたのだった。この遍歴については後に『コンパニョンの想い出』と題して詳細な記録を書き上げている[1]。遍歴の途次最も長く逗留したのはボルドーであった。ボルドーは経済的にも大きな力を有し、つまり多くの仕事があったのだ。コンパニョナージュの勢力も強く、遍歴修行の町としてはリヨンとならぶ重要な町であった。ペルディギエは一五ヶ月も滞在する。多くの仕事をこなし、腕をみがいた。しかしボルドーでのもっとも大きな収穫は、製図法の知識を飛躍的に高めたことだという。製図法の師としてペルディギエを導いたのは奇しくも同郷の「柱頭のアヴィニョン人」(Avignonnais-le-Chapiteau)。ヨーロッパ建築の基本であるオーダー、ギリシャ以来のドーリス、イオニア、コリント式といった円柱、柱頭の製図に造詣の深いコンパニョンであったのだろう。この師に出会い、高度な製図法を習得したことが、職人としての自覚を高め、後の不遇な時代に彼の生活を助けることともなる。コルポラシオン、そしてコンパニョナージュは石工のそれから始まるとされ、石工が最も誇り高いコンパニョナージュであったが、その石工はコンパスと直角定規だけで建築のあらゆる製図をこなした。このためコンパスと直角定規はあらゆるコンパニョナージュのシンボルとされる（図4）。指物大工たるアグリコルも大工の仕事に不可欠な製図法の習得に力を注いだのである。

そしてボルドー滞在の間のもう一つ大きな収穫は、読書の習慣を得たことであった。ペルディギエは、スイス人の徒弟ドゥヴィーニュ(Devigne)と知り合う。ドゥヴィーニュはシェークスピアの『オセロ』『ハムレット』に親しんでおりしばしば仲間に読み聞かせてやっていた。まことに職人らしくない職人がいたものである。

図4　パリの大工の支部旗、中央にコンパスと直角定規（©KUMASEGAWA）

感激したペルディギエは早速本屋に本を漁りにいくようになった。ある時、ヴォルテールの戯曲四巻本を手に入れ、むさぼるように読み、以後ボルドーの市立劇場に通い大いに芝居を楽しんだという。

その後パリに上りフランス古典演劇のメッカ、コメディー・フランセーズに仕事着姿で観劇に出かけた。しかしパリでは仕事に恵まれず花の都に長居はできなかった。パリ滞在を早々に切り上げたペルディギエは一路リヨンをめざす。

リヨンは「母なる町」(ville mère)と呼ばれ、コンパニョナージュにとってもっとも重要な町であった。グルメの町、そして中世以来フランス産業の、そしてヨーロッパにおける産業の中心地でもあった。そしてそのリヨン滞在中の一八二七年一二月二五日クリスマス、ペルディギエは指物大工の支部の頭領に選ばれた。コンパニョンとして遍歴修行に出てすでに三年。経験が見込まれた。いかにも名誉なことと思われたのだが、実際は前任者たちの不正、たるみ切った規律のおかげで支部財政は火の車。借金を踏み倒そうとするコンパニョンに返済を迫り、あるいは除名して、支部を立て直す大仕事が待っていた。

さらにこの当時、「掟」派で、スビーズ神父を奉ずる鳶大工がローヌ河にかかる橋の架橋工事をおこなっており、そこを通って仕事場にむかわねばならぬガヴォとのあいだで毎日のように小競り合いがあり、いつ大騒動になるやもしれなかった。しかし遍歴修行の途次、コンパニョン同士の血腥い争いを目の当たりにし、時には挑発をうけることもあったペルディギエは、無用な争いを避けるべく相手方の支部に乗り込み和平を提案した。一言の返事もなかったがさいわい相手方がガヴォを無視するという態度に出てくれたため大きな騒動に至らずに済んだ。

慣習通り七月二六日聖アンヌの日に任期を満了したペルディギエは一一ヶ月にわたり滞在したリヨンの町を後にする(図5)。一八二八年八月一七日のことであった。支部の立て直しに成功した

図5 任期を勤め上げたガヴォの支部長のクルール(1897年のクリスマスから1899年7月26日まで)
(©KUMASEGAWA)

頭領を送るにふさわしい盛大でしかし秘儀めいた見送りの儀式が行われたことはいうまでもない（図6）。リヨンからローヌ河を船でくだり、八月二四日、四年半ぶりに故郷のモリエールに帰りついた。二二歳と九ヶ月になっていた。コンパニョナージュの技術、歴史、文化、秘儀、秘密を身につけて、一人前の職人となるための長い遍歴の旅であった。

三、革命の季節

しかしペルディギエは故郷に腰を据えることができなかった。修行は終えたが、卒業したとはいえ、コンパニョナージュの将来を、コンパニョンの行く末を思うとモリエールの片田舎に引きこもってはおれなかった。翌一八二九年ペルディギエはパリに向かう。昼は指物大工として働き、夜は一一時まで製図の勉強、それから深夜まで読書というがむしゃらな生活を送った。

翌一八三〇年、七月革命勃発。この革命騒ぎ、「栄光の三日間」に、ペルディギエがどのようにかかわったかは審らかでない。しかし彼の失われた手紙には、共和国誕生の希望をかいま見て高揚するペルディギエの気持ちが読みとれたともいう。実際七月革命には多くのコンパニョンが実動部隊として加わっていた。親の代からの共和主義者であってみればペルディギエは、革命の、共和

図6　ボルドーにおける大工の見送り儀式 Etienne Leclair 画 ca. 1820（©KUMASEGAWA）

主義の理念を忘れたはずはないだろう。

当時の社会状況はコンパニョナージュを、そしてコンパニョンを未曾有の危機に追いやっていた。フランス大革命に至る一八世紀フランスは、資本主義的、自由主義的経済思想をすでに生み出し、小規模な手工業的生産から大規模な工場制生産への道を探るブルジョワジーを生み出しつつあった。啓蒙思想家ドゥニ・ディドロの『百科全書』は単なる百科事典の枠をはるかに超えて技術百科の趣を呈している。それまでそれぞれの職業（メチエ）は仕事の独占を図るためその技術を門外不出の秘密としてきた。『百科全書』はその秘密の技術を、微に入り細を穿ち詳述し、図示し、公に明かすことを目的とした[2]。大革命後の革命政府は封建的な社会体制を打破すべく、旧来の諸制度を禁止する。貴族特権の廃止、教会資産の没収は、これら旧来の支配層を解体し、その資産をブルジョワジーに分配するためであった。さらにはギルド、同業組合による独占的生産を、自由主義経済の立場からする産業振興の最大の障害とみなした。「職業選択の自由」の御旗のもと、親方達のギルド、フランス語で言うところのコルポラシオン（corporation）が禁止される。職人の同職組合たるコンパニョナージュとて同罪である。徒弟からコンパニョンを経て親方になるヨーロッパ伝統の同業組合の構成のもとで、コルポラシオン、ギルドの禁止は直ちにコンパニョナージュの禁止につながる。新規参入を阻む点では親方のコルポラシオンと等しかった。いずれも封建的な生産関係を前提とした組織であったのだ。

さらに革命政府は産業振興のため内国博覧会を開催する。その審査基準は次のようなものであった。

> 商業をうるおすのは日常的な製品であり、それゆえそれら日常的な製品は、しばしば一個人の腕前と忍耐を証明するのみで一地方の産業にとってなにも得るところのない名人芸より高い評価を受けるべきである[3]。

親方のギルド、コルポラシオンを、そして職人のコンパニョナージュを禁止し、近代産業社会への転換を図ろうとする革命政府にとって、工場性生産による製品こそが産業の主役であり、コンパニョンの「名人芸」、労働集約的な手工業製品は近代産業の足枷でしかなかったのだ。

さらにコンパニョナージュの暴力的な伝統が権力に疎まれた。革命の最中には貴重な実動部隊であり得ても、革命後には社会の不安定要因でしかない。なによりストライキを編み出し、中世以来ずっと非合法とされていたのが同職組合の職人ではなかったか。おまけにコンパニョン同士の喧嘩にも事欠かない。いかがわしい胡乱（うろん）な集団であったのだ。

親方たちが職業の独占権を奪われ、同時にコンパニョンも仕事を奪われていく。多くの手仕事が工場制生産で置き換えられていく。ペルディギエの生涯は、コンパニョンが仕事を奪われ、ルンペンプロレタリアートという新たな労働者階級がコンパニョンに代わって労働の、生産の主役となるのを目の当たりにする生涯でもあったのだ。

四、『コンパニョナージュの書』

このような危機の時代にあってペルディギエは一八三四年、ささやかながら一本を上梓する。コンパニョナージュではいずれの流派にあっても多くの歌が歌い継がれていた。職人の仕事に歌はつきもの。遍歴の道で、「おふくろ」で多くの歌が歌われた。中には敵対するコンパニョナージュを揶揄中傷するための歌まであった。ペルディギエも好んで歌を作り仲間に披露した。

ペルディギエは自作の歌にガヴォに歌い継がれた歌をあわせて公刊しようとした。革命騒ぎが打ち続くこの時代、ベランジェー(Pierre Jean de Béranger, 1780-1857)を始め多くの大衆歌謡作家が反体制的なシャンソンで巷間をにぎわしていた。フランス革命の後は市民が、民衆が社会の主役として躍り出た。その民衆のため多くのシャンソンが作られ、流布されていたのである。

アグリコルの計画はしかし仲間のコンパニョンを驚かす。永らく無法者の反社会的集団と見なされ、支部名簿、支部の活動記録を毎年焼却してまで秘密を守らねばならなかったコンパニョナージュである。たかがシャンソンとはいえ、秘密の一端を公にすることになる。

しかしペルディギエにはやむにやまれぬ思いがあった。それは最初の遍歴の道すがら立ち寄ったシャルトルでのこと。コンパニョン仲間と飲めや歌えの宴会をしていたそのなかで、ある歌の一句が彼の心に突き刺さった。

この歌を作ったのはだれか。
それは「マコンの誠実」。
四人の「掟の犬」どもの肝を喰らい
「犬」の餓鬼の頭を切り落とし
この臆病者の頭に
自分の立派なコンパニョンの名を刻み込んでやった。

「マコンの誠実」(Sincérité de Macon)はアグリコルと同じガヴォの指物大工。ガヴォと対立する「掟」派の指物大工はみずからを「犬」(chien)と呼び慣わした。その「掟の犬」四人の肝臓を喰らった「マコンの誠実」はさらにその「掟」派の徒弟の頭を切り落

とし、その頭蓋に「マコンの誠実」と、自分の通り名を刻み込んでやったというわけである[4]。

このような蛮勇をひけらかす数多くの歌がいずれのコンパニョナージュでも広く歌われていたのが実情であった。しかしアグリコルは馴染めなかった。コンパニョナージュ各派の間の暴力沙汰を、喧嘩騒ぎを幾度も目の当たりにして、それを嫌悪したのである。しかも時代はコンパニョナージュにとって冬の時代。仲間内で喧嘩をしている場合ではない。アグリコルは喧嘩を焚き付けるような歌の代わりに、コンパニョナージュの正しい伝統を伝え、職人の矜持を高める歌を広めようとした。

同僚のコンパニョンを拝み倒し、なんとか三三人の予約購読者を集め歌謡集を出版した。わずかに三六ページ、五〇〇部。予約購読者に手渡した残りは、各地の支部に無料で配った。

こののちペルディギエは病気や怪我に泣かされた。仕事もできず、幾度も自殺を考える。コンパニョナージュは相互扶助のための組織であったはずだが、そうした機能を果たせない支部が多くなっていた。とりわけパリにおいては、仕事の斡旋も失職中の賄いの世話もできぬ支部が多かった。大都会の孤独のなかで、かろうじて仲間の助力で危機を脱したが、しかし体力の回復ははかばかしくない。狭いアパートでできる小さな仕事をもらい、さらに製図法、建築知識を若いコンパニョンに教え、わずかな授業料を得てやっと糊口をしのいだ。

それでも一八三六年には第二歌謡集を出版する。今回は一三〇〇部を刷った。今回も各地の支部に配布した。ペルディギエの立場は第一歌謡集の時と変わらない。敵対するガヴォと「掟」派、いずれもが大事に歌い継ぐ歌の中から、コンパニョンの友情、誇り、伝統の豊かさを歌うものを選び編纂した。

その後、依然体力も回復せぬ中、一八三七年アグリコルは「兄弟の出会い」と題された小編を書き上げる。将来を儚んだアグリコルが遺言のつもりで著したという。

遍歴の途上、ガヴォと「掟」派の職人が出くわし、殴り合いの喧嘩となる。勝ち誇るコンパニョンが手負いの相手をつらつら眺めてみればそれは久しく顔を合わせたことのない実の弟だった。この事件を目撃したコンパニョンが仲間たちに無用な争いを避けるよう、そしてコンパニョナージュの大同団結を図るよう訴えると、コンパニョンの間にその輪が広がっていく、というプロパガンダの小品である。

この頃アグリコルは生涯の伴侶となるリーズ・マルセルと出会い、リーズのかかりつけの医者のお蔭でようやく体力を回復した。

一八三九年、アグリコルは新たな作品を世に問う。『コンパニョナージュの書』(Le Livre de compagnonnage)である。再版の要請の高かった第一、第二歌謡集に盛られたシャンソンに加えて、「兄

弟の出会い」はもちろん、製図法の要諦を記した「幾何学、図学提要」、さらには「コンパニョナージュ覚書」を書き加えて一本とした。この書の出現はコンパニョナージュの世界に大きな衝撃を与えた。歌謡集、「兄弟の出会い」は既に知られている。「幾何学、図学提要」ではウィトルーウィウスの、そしてヴィニョーラの名を挙げてオーダーの説明をしたりと、コンパニョンの教育には有用であったろう。

しかし「コンパニョナージュ覚書」が物議をかもした。この覚書はコンパニョナージュの秘密をすべて白日のもとに晒らしたのである。コンパニョナージュの伝説、歴史、それぞれの流派の沿革、儀式、組織の構成、役割が明かされたのである。歌謡集どころの騒ぎではない。まだまだ秘密こそコンパニョナージュの本質と考えられていた時代である。アグリコルはしかし、愚かな争いの数々、狂信的な傾向までも含め、コンパニョナージュの長所、短所すべてを明らかにした上で、正しい認識をコンパニョンに広め、大同団結を訴えた。そうしてコンパニョナージュを危機から救おうと考えたのだ。

アグリコルは過去にしがみつく多くのコンパニョンから非難を浴びせられた。しかしアグリコルの書は新聞各紙に取り上げられ、コンパニョナージュの実像を世に知らしめるところとなった。こうしてペルディギエの名はコンパニョナージュの世界のみならず広くフランス中に知れわたっていく。

五、ジョルジュ・サンド

そのような中アグリコルは女流作家ジョルジュ・サンドの知己を得る。サンドといえば、ショパンと、そして詩人ミュッセとの華麗な恋愛遍歴で名高い。しかしサンドが恋愛沙汰を重ねたのは、その人を惹き付けて離さぬ人間的な魅力によるものであろう。実際彼女の周囲には、フランツ・リスト、サント・ブーヴ、ハイネ、バルザック、フローベール、デュマ、ユゴー等々、錚々たる名士が見受けられた。その大きな包容力が波乱に満ちた男性関係をもたらしたとしても、一概に咎めることはできぬであろう。そして彼女の豊かな人間関係は世に聞こえた有名人のみに限られなかった。福音的社会主義者のラムネー、そしてサン・シモン主義者のピエール・ルルー。こうした社会主義思想家に彼女は近づいていった。植字工から身をおこしたルルーは『ルヴュ・アンデパンダン』(Revue Indépendant)を創刊するが、サンドがこれを援助したことはよく知られている。そしてルルーとの交流がサンドをアグリコルに引き合わせることとなった。

ペルディギエはピガール街一六番地（現在は二〇番地）にあるサンドの家を訪ねる。夕食をとりながら、アグリコルはコンパニョ

ナージュ統合の夢を、そしてその困難を語ったのであろう。

その一週間後、サンドはアグリコルに支援を申し出た。ペルディギエは一旦は固辞したが、思い直してサンドの厚意を受けることにした。いま一度フランス遍歴の旅を企て、ガヴォの、あるいは「掟」派のコンパニョンを訪ね、コンパニョナージュ統合を呼びかけようと考えたのである。アグリコルが受諾の手紙を出したその翌日に早くも返事が届いた。「あなたのかくも高貴な企てのためとあらば、それを支援するためにできることならなんでもいたしましょう。私に、そして私の親しい方々におまかせ下さい。」[5]

六、二度目のフランス遍歴

一八四〇年七月一六日アグリコルはパリを後にする。『コンパニョナージュの書』出版以来、フランス各地のコンパニョンから支持の、そして不支持の反応が数多く寄せられている。議論の環境は熟している。今回の遍歴の目的とするところは、論敵の誤解を解き、あるいは支持者の理解をさらに深め、コンパニョナージュ合同を説くことにあった。

翌一七日、オーセール(Auxerre)でさっそくピエール・モロー(Pierre Moreau)と会った。モローの属する「同盟」(l'Union)は、一八三〇年ツーロンの「掟」派の鍵職人の徒弟がコンパニョンの専横に対しておこした反乱に端を発したとされる。同じコンパニョナージュとはいえ徒弟とコンパニョンは位階が違う。コンパニョンは徒弟に先輩面をして無理難題をふっかけ、いじめに至ることがしばしばであった。しかし徒弟も大革命以後の民主主義的な思想に浴している。しかも工場制生産導入以降は無産労働者に社会の関心は向けられている。社会主義は無産労働者の生活向上、人権擁護を謳っている。コンパニョナージュの準構成員とはいえ徒弟はいつまで不合理な差別に甘んじねばならないのか。「掟」派からガヴォの「自由の掟」派にいたるまで、組織的差別に疑問を抱いた徒弟たちは、一八三二年、リヨンで「同盟」を正式に発足させたのだ。

「同盟」は、コンパニョナージュとの差異を明らかにするため、差別の原因であるとしてコンパニョナージュのあらゆる神秘、秘儀伝授、階級を廃した。こうした立場からはアグリコルのコンパニョナージュ至上主義は旧弊なものと映る。モローとアグリコルの会談はとどの詰まり並行線をたどった。

二〇日にはディジョンに着いた。ガヴォのコンパニョンから熱烈な歓迎を受けたアグリコルは、対立する「掟」派のコンパニョナージュをも訪ねた。ジャック親方を奉ずる「掟」派の皮鞣し工のコンパニョナージュは、他の業種のコンパニョナージュに対しても合同を呼びかけることを約束し、ペルディギエのために盛大

なパーティーを催してくれた。若かりし頃リヨンのガヴォの指物大工の支部長として、おそるおそる「掟」派の会所に乗り込んだその時と比べて、この変わりように大いに驚きまた意を強くしたのであった。

ローヌ川をくだる船便に乗り込んだ彼は、故郷のアヴィニョン、マルセイユ、そしてツーロンと、遍歴の旅をつづけていく。ツーロンではこれまた彼の論敵、指物大工のジョーム（Jaume）、「愛の花のプロヴァンス人」（Provençal-la-Fleur-d'Amour）と会う。ツーロンは「同盟」誕生のきっかけとなった徒弟の反乱をみた町であり、ジョームは、その反乱の当時からコンパニョナージュの刷新を考えていた。折も折、フランスを巡回視察していた大物政治家、内務大臣シャルル・デュパン（Charles Dupin）に訴える。視察旅行から戻ったデュパンは国会でコンパニョナージュ擁護の演説をおこなったとされる。

ジョームの改革案はしかしかなりラディカルで、コンパニョナージュの過去と訣別するべく、まったく別個の組織に置き換えようというものであった。対してペルディギエのそれはコンパニョナージュの原点への回帰を願うものである。にもかかわらず二人の出会いは実りあるものであった。ペルディギエはジョームから、「掟」派、ガヴォ、そして「同盟」に属する有力なコンパニョンなど、職人計三五名の署名をともなった賛同の趣意書を受け取ったのである。

八月一五日にツーロンを発ったアグリコルはエックス、アルル、ニーム、モンプリエ、ベジエと遍歴を続ける。行く先々で多くのコンパニョン、職人に話しかけ、『コンパニョナージュの書』に盛った考えを訴えた。さらに足を延ばして、ツールーズ、ボルドーの支部にも周囲の制止を押し切って出かけていった。アグリコルの書がコンパニョナージュの秘密を暴露したと強い反発を示していた支部である。しかし周囲の懸念に反して両市のコンパニョナージュはアグリコルをまことに好意的に迎えたのだった。

七、労働者の英雄

こうして二ヶ月を超えるフランス遍歴は終わった。この二度目の遍歴はさらにペルディギエの名を高めることとなった。一八四一年には五〇〇名もの予約購読者を得て、『コンパニョナージュの書』第二版を出版する。今までは自費出版であったが、今回初めて共和派の出版社から上梓され、書籍の通常の流通に乗った。彼の名が世間に広まる。

すでに社会主義が時代の大きな潮流であった。『コンパニョナージュの書』出版の一八三九年には『人民の蜂の巣』（La Ruche populaire）、翌一八四〇年には『アトリエ』（L'Atelier）と、社会主

義思想に目覚めた職人みずから編集する新聞が発刊され、多くの職人が論陣を張り、労働者の権利を主張することを始めた。エチエンヌ・キャベは一八四〇年社会主義的ユートピアの書『イカリア旅行記』を発表したが、この書は労働者の間でもベスト・セラーとなった。一八四三年八月にはフーリエ主義者の機関紙『デモクラシー・パシフィック』紙上にヴィクトール・コンシデランが「社会主義の原理」の連載を開始する。ミシュレは『民衆』(一八四六)を著す。一九世紀は労働者という見知らぬ階層の誕生を知った時代でもあったのだ。

一八四八年二月革命は間近であった。ブルジョワと労働者の対立の構図がますます鮮明になる。労働者が社会の前面に踊り出てくる。革命の主役、来るべき社会主義社会の主役として労働者が浮かび上がってきたとき、労働者の具体的な姿を、ブルジョワや貴族と同様、一個の人格をそなえた、顔の見える労働者を社会が求めた。ペルディギエはまさにそのイメージを体現する職人として現れ出たのである。

そのアグリコルにサンドは飛びついたのだ。サンドはアグリコルをモデルに『フランス遍歴のコンパニョン』(一八四一)を著す。そしてウージェーヌ・シューは『さまよえるユダヤ人』(一八四四―五)にペルディギエの姿を描き込むだろう。ペルディギエは職人の、労働者の英雄となったのである。

一八四一年一二月にはレジオン・ドヌール勲章授与の旨政府から通知があった。アグリコルの影響力を見て取ったルイ・フィリップ政府の懐柔策である。しかしアグリコルは勲章佩用を拒否。そしてサンドはアグリコルを労働者の、社会主義の英雄として貴族のサロンに紹介する。リストの愛人マダム・ダグー(Mme d'Agoult)をはじめ、共和派を自称する貴族はアグリコルとその妻リーズを競ってサロンに招き入れた。労働者が、コンパニョンが、社会主義思想の高揚の中で貴族と肩を並べたかに思われた。

社会主義者、女権伸張論者のフロラ・トリスタンとアグリコルの交遊もこの時期に遡る。トリスタンがプロパガンダのため一八四四年にフランス遍歴を試みたのはペルディギエに、コンパニョン範をとってのことにほかならない。

既に社会主義者は輩出している。フーリエ、ブランキ、プルードン、サン・シモン、ルイ・ブラン、しかし労働者はというと、いまだ組合を構成し得ず、労働運動の域には達していない。旧態依然とはしていたがコンパニョナージュが労働者組織の、労働運動のモデルを提供した。

八、二月革命

二二日に始まるパリ市民のデモは、翌二三日のギゾーの罷免で

もおさまらず、二四日パリ市民が議会を占拠し臨時政府を樹立。翌二五日にはルイ・フィリップが国外に逃亡し、七月王政はもろくも崩れさった。臨時政府は直ちに共和国樹立を宣言する。二月革命が成就した。二六日には次のような宣言がなされた。

フランス共和国臨時政府は、労働者が労働によって生きる保証を約束する。臨時政府は、全市民に労働の保証を約束する。労働者は、彼らの労働の正当な利益を享受するためには、相互に結合しなければならないことを、臨時政府は承認する。[6]

ガルニエ・パジェスとルイ・ブランによるこの宣言は革命初期の社会主義的理想をこの上なく明確に示している。搾取無き労働の権利、そのための団結権の保証。一七九一年国民議会におけるル・シャプリエ法以来、共和国のもとでも否定されて来た労働者の団結権がようやく認められたのだ。

労働者にはわが世の到来と思われた。しかし革命政府に労働権を保証する具体的なプランがあったわけではない。臨時政府のなかにそのような合意すらあったのかも疑わしかった。ルイ・ブランが主張した労働省の創設はあっさり拒否される。そのかわり、ルイ・ブランとアルベールを議長とする委員会を設置し、労働者のおかれた状況を改善する方策を研究するとしてルイ・ブランをなだめた。

それでも三月二日の法令では、普通選挙の実施とともに、労働時間をパリでは一〇時間に、地方では一一時間に短縮すること、また中間搾取として悪評高い下請け制度を廃止することが定められた。しかし労働時間の短縮は、労働者に歓迎される一方で、ブルジョワの側に大きな不満を生む。

それでも革命の熱狂は続く。立憲議会開催に向けて公示された総選挙は、無数の政治クラブを生み出し、また無数の新聞の発刊を見ることとなった。多くのクラブがパリ市庁舎に拠る臨時政府に代表団を送り、共和国支持を熱烈に表明し、ついでにクラブの主張を伝えた。

そして三月二一日には一万人ものコンパニョンが当時の「共和国広場」（現在のヴォージュ広場）に集い、コンパニョナージュの大同団結を誓ったのである。その後パリ市内を行進し、パリ市庁舎では臨時政府に対し共和国支持の檄をとばした。革命の興奮のさなか、ペルディギエの夢、コンパニョナージュの合同が実現したかのようであった。

九、代議士ペルディギエ

混乱の、そして狂騒のさなか選挙が行われた。歴史上最初の普

通選挙である。最低税額の定めも撤廃され、二一歳以上の男子であれば富める者も貧しき者も等しく一票の投票権を行使する。民衆の興奮は推して知るべし。

アグリコルは生まれ故郷のヴォークリューズ県、そしてパリを擁するセーヌ県、いずれの選挙区でも候補者に擁立され、そしていずれの選挙区でも当選した。セーヌ県ではバルベス、ヴィクトル・ユゴー、ピエール・ルルー、ウージェーヌ・シューといった著名人が枕を並べて討ち死にしたことを考えれば、まさに快挙である。ペルディギエの人気は尋常なものではない。ペルディギエは故郷の人々の好意に添えぬことを詫びながら、フランス全土の労働者、職人の代表たらんとしてセーヌ県選出代議士として議席を占めることを選んだ。

議会は誕生したものの、労働者保護の施策は打ち出されない。総勢九〇〇名の代議士、しかもその大多数がブルジョワであるなかで、アグリコルの声は掻き消されてしまう。アグリコルが議場で労働者の悲惨を訴えてもむなしかった。共和国政府が樹立されても社会体制が変わったわけではない。あいかわらずブルジョワの、資本主義の体制である。体制の変革はそうたやすいものではない。そして共和派は社会体制変革の具体的な道筋を示すことができない。国家財政は破綻している。ブルジョワ側の言い分はユゴーの次の言葉に要約される。

> あなたがたがあらゆる文明の神聖な土台をなす家と財産を危うくしないかぎり、私たちはいつでもあなたがたとともに人類の新たな本能を容認します。ですから私たちとともに、社会の一時的な必要を容認して下さい。[7]

そもそも家と財産を持たぬ労働者の答えは当然ながらノンであった。貧しい労働者にさらに窮乏を受け入れる余裕はない。

そして六月事件が起きる。国立作業所閉鎖をきっかけに、パリ市中にバリケードが組まれた。二三日に始まる市街戦では大砲が、反徒に、市民に向けられた。フランスの革命騒ぎのなかでもっとも凄惨をきわめたものであった。このバリケード攻防戦をヴィクトル・ユゴーは『レ・ミゼラブル』に描くだろう。二六日に暴動は鎮圧。裁判なしの大量処刑が行われ、大量の流刑囚がアフリカに送られた。ルイ・ブランはイギリスに亡命。議会では、共和派の、ペルディギエの反対にもかかわらず、結社の自由、労働時間の短縮はすべて反故にされた。共和国は死んだのである。

六月事件は労働者、ブルジョワいずれの側にも、大きな精神的挫折をもたらした。その期に乗じルイ・ナポレオンが九月の補欠選挙で当選を果たす。

一一月には「共和派の連帯」(Solidarité Républicaine)という結社が作られた。会長はマルタン・ベルナール(Martin Bernard)。ベル

ナールはバルベス、ブランキらと「家族協会」「季節協会」をつくり運動を繰り広げた印刷工の闘士である。そしてペルディギエは副会長としてこの共和派最後の砦で闘った。

一二月の選挙でルイ・ナポレオンが大統領に選出される。翌一八四九年一月には共和派の残党の拠る立憲議会を解散。五月一三日立法議会選挙がおこなわれた。アグリコルは再度セーヌ県代議士に選出された。しかし共和派は大敗を喫し、反動の嵐のなかで地下に潜らざるを得なかった。

一八五〇年九月から一〇月にかけてアグリコルは旅行をする。この旅行はしかしフランス遍歴ではなく、アヴィニョンへの帰郷の旅であった。この旅行の目的が実際どのようなものであったのかは審らかでない。しかしペルディギエは各地のコンパニョンを訪ね、共和国の理想を訴えたのだろう。この当時彼は『共和国』紙に寄稿した。

民衆においてはしかし大きな進歩が認められる。民衆は思考を重ね、啓蒙されつつある。共和主義者の数は増加し、共和国は大きくその根をフランスの大地に根付かせている。[8]

しかしそのナイーヴなオプティミズムとは逆に、行く先々で官憲は彼の行動を監視し、中央に報告していた。

大統領ルイ・ナポレオンの任期が切れようとしていた。共和派は来るべき大統領選挙に備えて候補者の選出を急ぐ。新聞王エミール・ジラルダンは労働者を大統領にという論説を掲げた。その有力な候補とされたのがマルタン・ナドー（Martin Nadaud, 1815-1898）、石工上がりの議員である。しかし一八五一年一二月二日、ルイ・ナポレオンは機先を制してクー・デターをおこし議会を解散した。共和派は抵抗の甲斐なく、六日には万策尽き、アグリコルは家に戻る。

翌七日早朝、アグリコルは扉を蹴破る音に眠りを破られる。官憲は恐れおののく家族の前でペルディギエを逮捕、警視庁に連行した。ルイ・ナポレオンの処断は速やかであった。翌一八五二年一月九日には共和派八四名を国外追放処分とした。そのなかにアグリコルの名があった。妻のリーズはジョルジュ・サンドに助けを求める。しかしサンドも窮地に陥っていた。「なにがおこっても不思議はありません。私は自分の番がくるのを今か今かと待っています。どうか私に手紙を書くことはおやめ下さい。かつてない監視を受けていますので」。[9]

一〇、亡命の旅

一月二〇日、アグリコルはまたしても旅立つ。しかしこの度は

遍歴ではなくブリュッセルへの亡命の旅であった。七月王政以降、多くの共和主義者、知識人がこの地に逃れていた。そして一八五一年一二月のクー・デターの後には、ベルギーは七千にのぼるフランス人亡命者を受け入れたのである。その多くはフランス語の通ずるブリュッセルに集まった。中心街にあるサン・ユベール通りが彼らのたまり場であった。ヴィクトル・ユゴー、エドガール・キネといった錚々たる名士から、貧しい職人のペルディギエにいたるまで、誰彼となく情報を求めて集まった。

しかしブリュッセル滞在も容易ではない。大都会ゆえ生活費は高く、しかも働くことは許されない。さらには週に二回警察に出頭し、その都度ヴィザを更新し、その手数料を払い、といった具合に監視も厳しい。それでも資産のある名士は、毎日キャフェやレストランで、無聊をかこつこともできた。しかしペルディギエにそのような余裕はない。ペルディギエは、あの大統領候補のマルタン・ナドーとアパルトマンを借り、共同生活をして出費を切り詰める。

しかしベルギー政府は亡命者のブリュッセル滞在をさらに厳しく制限するようになる[10]。ナドーが、そして程なくしてペルディギエもアントワープへの移住を命ぜられた。ヴィクトル・ユゴーしかり。アントワープはフラマン語圏である。フランス語、フラマン語の言語対立は、今日なおベルギーの統一を危うくしかねない根深く深刻な問題である。フラマン語圏でフランス語を使えば嫌がられる。マルタン・ナドーはそそくさとイギリスに渡ってしまった。ペルディギエは同じくアントワープに移されたルノー(Renaud)、ベッス(Besse)らと同じ建物に暮らすことにした。そのうちベルギーを代表する海運会社の社長ニス(J. B. Nys)の知遇を得、現地の進歩的知識人の知り合いも次第に増えていった。海運によって栄えるアントワープはおのずと世界に開け、進取の気性に富んだ町でもあったのだ。

しかし言葉の通じぬアントワープでは職人のための製図教室を開くことすらできない。ただ職人のために民主主義の歴史を綴ること、そしてみずからの自伝『コンパニョンの想い出』を綴って気を紛らすよりなかった。監視もあいかわらず厳しい。アグリコルはスイスへの脱出を考えるようになる。患っている気管支炎の治療にも好都合であろうし、なによりスイスにはフランス語圏がある。

一八五二年九月一四日、ペルディギエはバーゼルに、そして一六日夜にジュネーヴに着く。ルイ・ナポレオンの圧力にもかかわらず、ジュネーヴでは当局の監視も緩く、ベルギーよりはるかに自由がきいた。なによりフランス語が通じるここでは職人相手の教室を開くことができる。若い職人達に語りかけ、思いを伝え、幾ばくかの月謝を得ることもできた。

しかしジュネーヴの湿気のせいか、またしても気管支炎をこじらせた。秋に再び教室を開いたものの数ヶ月と持たなかった。生活の糧すら稼ぐことができず、アグリコルの焦燥は募る。

アグリコルはついにフランスへの帰還を考える。すでに多くの亡命者が帰国を許されている。サンドが、あるいはまたフロラ・トリスタンの弟子エレオノール・ブラン（Eléonore Blanc）が彼のために立ち働いた。第二帝政はすでに堅固な基礎を築き上げている。その繁栄を内外に明らかにすべく一八五五年にはパリ万国博が予定されている。

こうして一八五五年八月三〇日内務大臣名の通知が妻リーズに届く。うわさは万国博の工事現場で働く労働者、コンパニョンに直ちに広まった。ペルディギエは依然として労働者の英雄であったのだ。一二月五日パリに帰還。およそ四年に及ぶ亡命の旅であった。

一一、近代労働運動の誕生

二月革命からすでに七年。亡命のペルディギエがなおもノスタルジックなコンパニョナージュ復興を思い描いている間に、労働者を、職人をとりまく状況は大きく変わってしまっていた。近代労働運動がその姿を現してきたのだ。

第一回ロンドン万国博覧会が開かれた一八五一年、イギリスで合同機械工組合（Amalgamated Engineering Union）が創設される。シドニー＆ビアトリス・ウェッブによると、この組合は蒸気機関など高度な機械製造に携わる職人が、完備した保険を含む共済システムを作り上げ、各地方組織を中央の強力な指揮系統下に置き統制のとれた全国組織にまとめあげたものである。その精緻な規約は多くの近代的組合が参考にするところとなり、大きな影響を与えた[11]。労働貴族ともいうべき熟練工の組織ではあったが、ともかく近代的産業別労働組合の第一歩であった。

さらに一八五九年の労働争議をきっかけに、ロンドンの大工職人は翌一八六〇年に合同大工組合（Amalgamated Society of Carpenters）を結成する。さらにはこの争議を支援した組合諸団体はロンドン組合評議会（London Trades Council）を結成したのである[12]。いまだ職人を主体とした組合ではあるが、古いしきたりを廃し、秘密結社的性格を一掃し、合同機械工組合にならって規約を公開し、あくまで合理的な運営に基づく近代的労働組合を目指した。サンディカリスムの誕生である。

イギリスは産業革命とともに、近代労働運動においても先頭をきっていた。ルイ・ナポレオンのクー・デターののちフランスの山岳党員、共和主義者の多くはイギリスに逃れた。ルイ・ブラン、ルドリュ・ロラン、フェリックス・ピア、そしてマルタン・ナドー

らは亡命先のロンドンでイギリスの新しい労働運動を知ることとなった。近代的労働運動のあり方、サンディカリスムを目の当たりにしてみれば、アグリコルが夢見た古き良き時代のコンパニョナージュはもはや時代遅れの遺物のように思われた。

さらに一八六四年九月、労働者の大会がロンドンのセント・マーチンズ・ホールで開かれた。第一回インターナショナルである。この大会は英仏両国の労働者のより緊密な連携を主たる目的として開かれ、一方でサン・シモン主義者が、そして他方でマルクス、エンゲルスが、思想は大きく隔たるもののいずれも労働者の世界的な連帯を唱えていた。すでに近代産業社会は国際競争の時代に入っている。そして労働運動も国際的な規模で展開される時代になっていたのだ。

フランス側の労働者代表はパリで会合をもつが、あろうことか会合の場はナポレオン三世のパレ・ロワイアルの邸宅であった[13]。この席上ブロンズ職人のトラン(Tolain)とペラション(Perrachon)、そして眼鏡職人のヴァリエ(Vallier)は結社の自由、ストライキ権を認めさせようとした。もちろんそのような権利はすぐには認められない。しかし時代は労働者、職人が、親方、企業主を飛び越えて、政府と直に交渉するまでになっていたのである。トランは第一インターナショナルの常連で、第二帝政崩壊の後はパリ一一区の助役、代議士、そして上院議員として政界で活躍することになる人物である。亡命から帰国した後選挙にも打って出ず、隠棲を決め込んだかのペルディギエとは好対照であった。ペルディギエはなおコンパニョナージュを通しての労働運動を考えている。しかし時代はコンパニョナージュの枠をはるかに越えたところで労働問題を議論するに至っていたのだ。

労働運動の主体は工場で働く労働者、近代工業を支える労働者であった。もはや中世来の手仕事を続けるコンパニョンは、生産の面でも、運動の面でも後景に退くよりなかったのである。

一二、和解の宴会

この時期にしかしアグリコルを喜ばす事態もなかったわけではない。一八五九年には恩赦がくだり国外追放となった者の帰国が許される。経済の繁栄により支配の安定を確信した政府は締め付けを一層緩くした。それに応じて、労働者の団体がそこかしこで公然と活動を始める。コンパニョナージュも組織を誇示するかのように盛大な祭りをおこなう。

とりわけ一八六一年の万聖節一一月一日にパリでおこなわれた宴会はアグリコルに強い感銘を与えた。宴会はベリかあさん(Madame Berri)の歌で始まった。主催者のソロモン派の石工の「おふくろ」である。この派は「異人の石工のコンパニョン」(les

compagnons tailleurs de pierre étrangers）と称し、ガヴォであるアグリコル同様「自由の掟」派に属す。しかし石工ゆえその矜持は高く、常に他業種に対しての上席権を主張し、また対立する「掟」派からはもっとも恐れられたコンパニョナージュである。しかしこの度の宴会にはまさにその宿敵である「掟」派の、親方ジャックを奉ずる石工、「旅人の石工」（les tailleurs de pierre passants）が招かれていた。かつて互いに出くわせば必ずや大立ち回りに至ったこの両者が席を同じうしている。一昔前には想像だにつかぬことであった。宴会にはその他にもさまざまのコンパニョナージュが招かれていたのだ。そして夜も更け「一二時の鐘がなるとひとびとは「結びの輪」を口にした。ダンスはひとまず中断され、ホールに大勢のコンパニョンが集まってきた。クルールを打ち違いに掛けた異人の石工がいる、旅人の石工、屋根職人はクルールを帽子に巻き付け、（中略）この古くからの仇同志が、いまや兄弟となって、リボンを貸し、付けるのを手伝ってやっている。その光景は異様であったが、心和むものであった。喜びの余り、涙がとまらなかった。」[14]

ブリケによればこうした「和解の宴会」はパリに引き続いて一八六五年四月にリヨン、五月にはナントで、ニオールでは一八六八年と、フランス各地で開かれた[15]。コンパニョナージュ同士の反目はついに解消した。永年アグリコルが夢見てきたコンパニョナージュの合同はようやく実現した。

ジャンセルムの提案を受けペルディギエが三度目のフランス遍歴を行ったのはこのような状況のもとであった。アグリコルが各地でさまざまなコンパニョナージュから熱狂的に受け入れられたことはいうまでもない。

至る所で常に暖かく迎えられました。至る所であらゆる「掟」のコンパニョナージュが一緒に歌を歌うのを目撃しました。（中略）一〇月三日にリヨンに着きました．翌日午後四時にピュジョルの建物の三つの長いテーブルに一五〇人ものコンパニョンが席についていました。ありとある職業の、ありとある流派のコンパニョンがいたのです。友と呼び交す声が聞こえてきました。友情の歌が元気一杯打ち続き、拍手が部屋に響き渡りました。なんとすばらしい一日！なんと力強い表現！なんという喜び！なんという熱狂！なんという幸せ！未来へのなんという約束！リヨンに集ったコンパニョンは、銀の杯、金の指輪を私に贈ってくれました。皆さんありがとう。そして出立の日が来ました。それはそれは盛大な見送り儀式でした。[16]

ペルディギエの畢生の夢は成就した。しかし同年、一八六三年

に行われた国会議員選挙には、多くの労働者代表が立候補したにもかかわらずペルディギエは出馬しない。もはやコンパニョナージュの労働界に占める部分はわずかなものでしかなかった。既に想い出のような世界でしかなかった（図7）。

一三、鉄道と遍歴

さらに鉄道がコンパニョナージュの古き良き伝統を変質させる。フランス初の鉄道は一八三七年、サン・シモニアンのイザークとエミールのペレール兄弟によって、パリ＝サン・ジェルマン間に敷かれた。兄弟はルイ・ナポレオンのクー・デターの翌一八五二年、「動産銀行」（Crédit mobilier）を設立し、この銀行による大量の資本投下がフランスの鉄道網を急速に発達させた。クー・デターの一八五一年末に総延長三五五四キロであったフランスの鉄道は、第二帝政が崩壊する一八七〇年には一万六九三八キロにも達したのである[17]。こうして第二帝政の二〇年間にフランス各地の主要都市はすべて鉄道によって結ばれた。鉄道網の整備は鉄工業のみならず、流通の大動脈を形成することによって第二帝政期に空前の経済発展をもたらした。しかしこの鉄道網の発達がコンパニョナージュの決定的な変質を招いた。何が変わったのか。遍歴である。徒歩による遍歴が鉄道による移動に取って代わられたのだ。

図7　正装のペルディギエ

遍歴がコンパニョンを育てる。中世来そのように信じ、実行してきたはずのコンパニョナージュである。しかし鉄道は徒歩とは比べようもない速度によって都市間を短時間で結びつけた。徒歩で移動する間、コンパニョンはさまざまに青春を謳歌することができた。フランスの大地を、田園を、都市を、目で、耳で、足で、全身で抱きしめることができた。しかしその反面、移動の間は仕事にならない。鉄道の普及はその稼ぎのない移動の時間を大幅に短縮したのである。すでに遍歴の旅の主要な経由地はすべて鉄道によって結ばれている。また一八五一年から一八七〇年の第二帝政の二〇年間に鉄道運賃は大幅に下がった[18]。悠長に歩いている場合ではない。汽車に乗っていち早く次の仕事場をめざさねばなら

ない。

こうしてコンパニョンの遍歴が廃れてしまった。そして遍歴を助けるさまざまのシステム、人生のなんたるかを教えてくれた「おふくろ」、先輩による手間隙かけた教育、大事な儀式、見送りの儀式も。何よりコンパニョンの文化の根源にあるフランス遍歴の伝統が崩され、コンパニョンはみずからのアイデンティティを失ったのである。

大革命前、圧倒的な組織率を誇っていたコンパニョンの数は微々たるものとなる。伝統を失ったコンパニョナージュ、もはや活動を止めたかのペルディギエ。一八七〇年パリ・コミューンに際してもペルディギエは動こうとしない。共和主義者であっても、アグリコルが求めたのはあくまでコンパニョナージュの存続であり、近代的労働運動にまでその思想の射程が及ぶことはなかった。一八七五年三月二六日永眠。七〇歳の生涯であった。三〇日の葬儀の列はペール・ラシェーズ墓地に向うあいだ数千人におよぶパリ市民でふくれあがったという。コンパニョンの寄付金で建てられた墓にコンパニョンの儀式にのっとり埋葬された。

一四、しかしコンパニョンは生き残る

一九世紀、絶対王政の終焉とともに国民国家の理念が、それとともに国民文化の理念が台頭する。絶対王政はルネサンス以降の古典主義、普遍主義美学を支えてきたが、革命後の共和主義思想のもとではそれとは異なる美学が求められた。そして国民文化として脚光を浴びたのがゴシック芸術であった。

フランスにおけるゴシック復興の旗手ヴィオレ・ル・デュックはとりわけ共和主義的視点からのゴシック再評価をおこなう。ヴィオレは共和主義的なギリシアと帝政ローマの比較からギリシアの芸術を高く評価する。

> ギリシアの芸術は自由で独立しており、ローマの芸術は奴隷だ。（中略）ギリシアの芸術家は、ローマ人よりは中世の芸術家とのほうがよりよく理解し合えると考えるのが妥当である。いままでローマ人はギリシアの芸術家の味方と考えられてきたが、その実彼らはギリシアの芸術家を圧迫してきたにすぎない。[19]

そしてフランス中世はギリシア的な自由を内包していたとする。

> ギリシア社会は、より劣るものの中世社会と同様、商業と芸術とともに発達していた。芸術は、商業と同様、自由によってしか存在することはできない。[20]

ヴィオレにとっては、フランス中世のゴシック芸術こそ、ギリシア芸術同様、自由によって育まれた芸術であり、なによりフランス固有の芸術、自由な民衆が生み出した芸術であった。そしてその自由な芸術を産み出したのは他ならぬコンパニョンであった。実際、多くのコンパニョンがヴィオレの修復事業に携わったことが知られている。なかでも「自由の掟」派の大工である「アンジェの天才児」(Angevin l'Enfant du Génie)ことアンリ・ジョルジュ(Henri Georges, 1818-1887)はヴィオレのおこなったパリのノートル・ダム寺院の、そしてピエルフォン城の修復に関わり、文字通りヴィオレの片腕であった。

あるいはイギリスに於けるラスキン、モリスのゴシック・リヴァイヴァルも、ヴィオレ同様、ゴシック中世社会における生産関係の再評価をもとにそのゴシック観を組み立てたのだ。なかでもモリスは社会主義的な観点から、搾取なき生産関係を中世に求め、一九世紀の世に中世的生産関係の再構築を夢見た。織物、染色、版画、壁紙等々の工芸に自ら手を染め工場生産に対抗する道を探ったのはこのためである。

工場制生産において搾取される非熟練労働者に、コンパニョンの手工業生産が対比される。この対比の中からレッサー・アート、マイナー・アートの再評価がうまれた。ここから工業デザインへの転換はわずかな道のりである。

コンパニョンの制作の質の高さが、たとえマイナーと形容されようともアートとして評価される。工業製品にマイナー・アートに比肩する高い質をいかにしたら付与できるか。ここから工業デザインが生まれる。クリストファー・ドレッサーは日本の手工芸品をつぶさに研究し、その質の高さを英国工業製品に反映させるべく数々のデザインを行ったではないか。ゴシック・リヴァイヴァル、あるいは工業デザインの誕生といった一九世紀美学の重要な潮流は中世以来の伝統を保持する職人、コンパニョンなしには生まれ得なかったであろう。ペルディギエの夢見たコンパニョナージュ復興はこうして一九世紀後半に彼の思いもよらぬところで再評価を見ていたのだ。

そしてコンパニョンは今日なお生きながらえている。いかに工場生産が手工業生産を駆逐したとはいえ、大量生産とは無縁の建築、工芸、食品加工の分野は今日に到るも職人の手仕事の世界である。フランスでは近年とみにコンパニョナージュへの関心が高まり、手仕事に自らの在りようを確かめようとする若者がコンパニョナージュの門を叩いている。ペルディギエの旅も無駄ではなかったのだ。

注

1 Agricol Perdiguier, *Mémoires d'un compagnon*, Genève, 1854, 1855.

réédition avec une préface de Maurice Agulhon, Paris, Imprimerie nationale, 1992.

2 フランコ・ヴェントゥーリ、大津真作訳『百科全書の起源』、法政大学出版局、一九七九年、一二九頁。

3 拙論「ナポレオンのコルベール」横山俊夫編『視覚の一九世紀』、思文閣出版、一九九二年、一四一頁。

4 Agricol Perdiguier, *Le Livre du compagnonnage*, Paris, Pagnerre. 1841, réédition avec une préface de Roger Lecotté, Marseille, Laffitte reprints, 1985, tome 1, pp.1-2.

5 Perdiguier, *Le Livre du compagnonnage*, tome II, p.65.

6 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、一九七九年、三六五頁。

7 ユゴー「行為と言葉」。J・カスー著、野沢協監訳『一八四八年』、法政大学出版会、一九七五年、一八七頁。

8 *La République*, 11 Novembre 1850.

9 Georges Sand, *Correspondance*, textes réunis, classés et annotés par Georges Lubin, Paris, Garnier frères, 1964, t.X, n.5201.

10 Jean Briquet, *Agricol Perdiguier-compagnon du Tour de France et Représentant du Peuple*, Paris, Editions de la butte aux cailles,1981, pp.259-284.

11 シドニー&ビアトリス・ウエッブ著、荒畑寒村監訳、飯田鼎、高橋洸訳『労働組合運動の歴史』、日本労働協会、一九七三年。合同機械工組合については上巻、二三三—二五二頁。

12 同書、二六一—二六二頁。

13 Georges Duveau, "La jeunesse de Martin Nadaud", in Martin Nadaud, *Mémoires de Léonard*, ancien garçon maçon, Paris, Egloff, 1948, p.37.

14 Jean Briquet, op, cit., p.290.

15 Jean Briquet, Id.

16 Ibid, pp.530-1.

17 E. Martin Saint-Léon, *Le Compagnonnage*, Paris, Armand Colin, 1901, réédition, Paris, Librairie du compagnonnage, 1977, pp.179-180.

18 Ibid, pp.162-3

19 Eugène-Emmanuel Viollet-le-Duc, *Entretiens sur l'architecture*, Paris, 1863-1872, réédition, Bruxelles, Pierre Margada, 1977, p.75.

20 Ibid., p.76.